

ぎ、十九年御細工奉行、延寶四年物頭並に進み、寶曆二年十二月四日六十四歳で歿した。致貞家傳の兵法と算数を能くし、籌算式・算法指要・曆本抄・大應公御夜話・甲陽軍鑑略解小解・甲陽軍鑑軍法之卷正解・甲陽軍鑑軍法之卷講解・甲陽軍鑑軍法之卷集註・甲陽軍鑑軍法之卷圖解・城取習練之法大意・樞要論抄・鈔秘藏・鈔秘稿・兵學雜話(永貞・武貞共編)・陣取方向魚鱗同異之辨・千慮一得・諸士心得・理數集要等がある。

アリサハムネトウ 有澤致遠 通稱彌三郎。延寶五年組外に列し、御書物役として三十俵六人扶持を受け、天和元年兄又助俊參の遺知中百石を襲ぎ、寶永五年書寫奉行となり、正徳四年百石を加へ、享保十一年御書物奉行に進み、十三年御免、十八年七月廿八日八十二歳を以て歿した。

アリサハモリサダ 有澤盛貞 通稱平次右衛門。致貞の養子。元文四年新番となり、前田宗辰の御次番に任じたが、延享元年指除き遠慮を命ぜられ、二年御免、四年武具奉行に任じ、寶曆四年養父の遺知二百石を襲いで組外に列し、九年七月廿四日歿した。

アリサハモロサダ 有澤師貞 通稱武松。守右衛門・森右衛門・才右衛門・采女吉。父は貞庸。文政四年新知百石を受け、組外に列して御近習動となり、八年八十石を加へ、表小將・御馬廻使役・頭並に歴任し、天保八年正月父の遺知四百五十石を襲いだ。師貞教誡の著がある。

アリサハヨリサダ 有澤倚貞 通稱小三郎。父は盛貞。寶曆九年遺知三の一を受け、組外に列し、十一年本祿二百石を襲ぎ、大小將を

經て表小將に任じ、明和七年七月十日旅中武州深谷に歿した。年廿四。濱調練方心得書の著がある。

アリサハリユウ 有澤流 有澤永貞が佐々木秀乘から傳へられた甲州流の兵法を、加賀藩では有澤流と稱し、子孫世々之を傳へた。アリサハリユウチヨウケンベンモウ 有澤流町見便蒙 寶永八年三月有澤武貞の著。町見とは規矩術ともいはれた測量法のこと、支那の海島算經の遺法に、多少の算學を加味し、城砦その他の土功に應用せられたのである。本書有澤流と稱するも、武貞の師富山の藤井半知所傳のまゝで、敢へて特異の點があるわけではない。

アリサハリヨウチヨウ 有澤了長 明和六年外科醫として召出され、十五人扶持を受けた。子孫長安・邦安・了長・了貞等相繼いだ。アリタシヨウエモン 有田正右衛門 寶曆五年召出されて江戸在住の御歩に任じ、御馬乗役となり、五十俵を受け、明和二年新知百石で組外に進み、安永中五十石を増し、天明六年歿。子孫相襲いで藩に仕へた。

アリタトミマサ 有田福正 通稱平次郎。正兵衛・備右衛門。明和八年新番御馬方となり、天明五年新知百石を受けて組外に進み、後五十石を加へ、六年父正右衛門の遺知百五十石を襲いで自分知を除かれ、寛政十一年五十石を加へ、文化元年歿した。

アリツナ 有綱 加賀の刀鍛冶。光長の末かといふ。その作に藤島有綱と銘する。アリノママ 有の儘 一册。外題に俳諧と角書がある。金澤の俳人剛更著。明和己丑梨一序。板元不明。金澤を中心にした當時の俳

人の吟を集めたもので、その間に俳論があり、消息があり、挿畫があつて、極めて版はしく編輯してある。題號は卷末にある著者の句「ともにしたはん翁の道のありのまゝ」から採る。

アリヒラ 有平 加賀の刀工。基六兼若(越中守高平)の二子。加州住藤原有平又は越後守藤原有平と切る。寛永頃。アリマツ 有松 石川郡富樫庄にある部落。明徳二年五月九日右京大夫の判書に、加賀國有松村地頭職を小早川民部法限實忠に沙汰付すべきことが記されてゐる。龜尾記には、有松村に有松次郎三郎などといふ富樫氏類族の館跡が田となつてゐるとある。津田鳳卿の石川訪古遊記には、『有松村接金澤府泉街。民家三十八戸。』と見える。

アリマツキブネジンジャ 有松木船神社 石川郡有松に在つて、舊社であるといふが社傳はない。藩政時代には金澤陣川川上の山伏寶高寺が之に奉仕した。今寶船神社と號する。

アリマツシヨウ 有松庄 石川郡に在つた。建内記正長元年五月廿一日に、『加賀國有松庄、中納言入道違上意之時、自最初被充行藤中納言入道光了。』とあるものは是である。

アリマツマチ 有松町 金澤の町名。泉新町の南で、もと有松村の村地であつたのを相對請地となし、町家を建てたに起る。年代摘要に、『享保十二年九月泉村・有松村町割新家願之通家建。』とあるのは即ちそれで、文政四年二月金澤町奉行の支配地となり、初めて町名を稱し、明治十二年に至り金澤に編入せられた。

アルキ 歩き ↓ハシリ 走り。アルキマチ 行町 石川郡中奥郷に屬する部落。初めは走町というた。寶永誌に、行町村領の内に館島といふ所があつて、塩屋安藝守の館址であると記する。又石川訪古遊記には、塩屋安藝守館址は今民居となつて、郷用水の支流御館川がその外を繞ると記される。

アキソメガハ 藍染川 ↓アヒソメガハ 逢初川。アキハチベエ 阿井八兵衛 大坂冬陣の役、十二月四日の戦に、前田利常に屬する士にして、軍律を犯し先鋒中に混じたものがあつたが、利常之を檢して馬廻阿井八兵衛・大小將山田大炊二人なることを知り、命じて自刃せしめた。阿井一に相野に作るものは非であらう。

アラアマゴロウ 青天小五郎 河北郡松根山城主洲崎兵庫の裨將。天文十九年五月島山氏の反將遊佐綱光に誘はれ、兵五千を率ゐて共に能州に攻入つたが、温井・長二氏の爲に破られたと長氏家譜に記されてゐる。

アラガサキ 青ヶ崎 源平盛衰記壽永二年の戦に平通盛の軍は、加賀の宮・腰・徳藏・大野・青崎・室尾・白角見・白尾から志雄山に向かつてゐる。又義經記には、『かゝの國宮のこしに出で、大のゝわたりし給ひて、あをがさきのはしを越えて。』とある。この青崎は、應永二年の天龍寺文書に、倉月庄と大野庄との境を、『川者限青崎橋』とあるもので、今の石川郡柴崎に當る。

アラキギダユウ 青木儀太夫 父伴人正は朝倉義景の臣であつた。儀太夫前田利家に仕へて二百五十石を領し、子孫相襲いで藩に仕